

ワクワク留学体験記

MIT Media Lab

日浦慎作（大阪大学）



Ramesh 宅で
(帰国直前のお別れパーティ兼誕生日パーティ)

1. はじめに

転石苔むさず，という諺は肯定的な意味にも使われるということをご存じの方は多いと思う。私自身気がつけば，学位を取り研究者として雇われる立場になってから早 10 年余り。その頃から「そろそろちょっとは転がらねば」と，海外に出て新しい空気に触れたいという思いが募るようになった。もっとも，当欄に寄稿される多くの方々よりも歳を食ってしまった私は学生の研究指導や講義，学会の委員会幹事など担当している上，三人の子どもたちのうち長男は既に小学生。いまさら席を空けるのは容易ではなかったが，周囲の方々，特に上司の佐藤宏介先生のご理解ご協力と，生活に関するすべてを整えてくれた高校英語教諭の妻に支えられて 2008 年 8 月から 2009 年 3 月までの間，MIT Media Lab は Ramesh Raskar 准教授のもとへ「海外逃亡」したので報告する。

2. Ramesh と研究

Ramesh との出会いは数年前の PROCAMS ワークショップであった。そこで私は，我々の研究グループが取り組んできたプロジェクタ投影型 MR 技術の概要紹介を行い，研究分野の近い彼と懇親会で意気投合した。このとき彼は SIGGRAPH で発表予定の符号化露光に関するプリントアウトを 1 枚だけ持ってきており，それをおもむろにポケットから取り出し「実は今度，こんな発表をするんだ」と教えてくれた。ピンと来た私は「僕も昔，レンズにマスクを付けた符号化開口というのをやってて，・・・」とノートパソコンを取り出して説明を始め，周囲の人たちに「こんなところでまだディスカッションかい？」と冷やかされながらも，その後流行するコンピュータショナルフォトグラフィ技術の根幹に関わるアイデアについて話し合ったように思う。このとき同席し

ていた向川康博先生が今年 6 月から同じく Ramesh のところへ出かけていることを思うと，つくづく奇遇である。ともあれ，これをきっかけに彼とは連絡を取り合うようになり，その翌年には国際会議のついでに MERL に呼ばれ数日を過ごすなどした（当時彼はまだ MERL に在籍していた）。ただ，大学教員がその身分を保ったまま籍を置くことを考えると，企業の研究所は大学ほど簡単ではない。そのようなことで，いよいよ行き先を逡巡していた私のところへ 2007 年年末，Ramesh から MIT Media Lab へ移籍するとのメールが届いた。早速希望を伝えるメールを送ったところすぐ快諾の返事があり，その後文科省の補助金も無事獲得できたことでいよいよ，ことが軌道に乗った。

渡航準備については過去の当欄で既に触れられていることと重複するので割愛するが，やはりビザの取得には時間がかかるので早めに進めるべきであるということだけは述べておく。ボストン近郊には（土曜日だけ開講する日本語補習授業校を除けば）日本人学校はなく，就学児童は現地の学校で英語の授業を受けねばならないが，幸いボストンの隣のブルックライン市には医療関係者の子女が集まっている小学校があり，長男は 20 名中 5 名が日本人というクラスに入れた。とにかくエンカレッジが大変上手な「褒める教育」が徹底されており，2 年生の長男も大いに自信を付けて帰ってこれたことは幸いであった。

Ramesh は大変快活で日本に対する理解も深く，また研究を主導するパワーに満ちあふれた方である。彼のパーソナリティについては 2007 年 9 月の当欄に掲載された橋本悠希氏の MERL インターン体験でも詳しく紹介されており是非あわせて参照いただきたいが，研究そのものだけでなく，その研究成果を一流の国際会議に

採択させることに対する意欲が並大抵ではない。もっともこれは彼に限らず米国一般に言えることかもしれないが、将来の成功のためには業績がすべてである、という意識が院生にまで徹底している。日本では良い結果が出ればそれに分野と時期、難易度が合致する国際会議を選んで発表に結びつける、というケースも多く見受けられるが、少なくとも Ramesh のグループではまず国際会議(特に SIGGRAPH)ありきである。それに向けて皆が猪突猛進に取り組んで、しかし思ったような結果が出なかった場合、「今回は見送ろう」という決断が下されるのはせいぜい締め切りの前日か当日である。SIGGRAPH について言うと、米国でも他の一流研究グループでは「締め切りよりずっと前に論文は出来ていて、あとはひたすらブラッシュアップ」という話もいくつか聞いたが、少なくともこれは彼のグループには当てはまらない。私が参加したプロジェクト“Bokode”は幸い SIGGRAPH2009 に採択された(そして6件の Highlight Papers に選ばれた)が、こっそりその内情を明かすと、実は1月20日の締め切りに対し1週間前の時点で結果どころかプログラムの開発を始めたばかり、という状況であった。もちろん数ヶ月前から密な議論を繰り返し、様々な可能性や手法は洗い出してあったが、プログラムを実装しつつ実験データを取り、さらに改善する、という繰り返しが最後の1週間のものであったことは、データを格納したフォルダの名前が0113から始まり0119で終わることが証言している。最後の1日でようやく論文が8ページに収まり、文法やスペルチェック、ビデオ編集どれもが締め切りの数時間前のことであった。そんなことで私自身も締め切り前にラボで2泊し、共通スペースのソファで早朝仮眠しているところを同フロアの石井裕先生の秘書さんが見て、たいそう驚かれたと言うこともあった。

SIGGRAPH の締め切り後、グループのミーティングで「この体験から何を学んだか？」について議論する機会があった。そこで私は「日本人は農耕民族だ。半年間の努力が喜ばしく平和な収穫をもたらす。しかし米国は狩猟民族の国だと知った。狩りは最後の瞬間こそが大事で、“it is hard, painful, and sometimes dangerous.””と思うの外受けたようで、その後国際会議の締め切りは冗談交じりに hunting と称されるようになった。ともあれ最近あまり自分自身で研究を遂行する時間のなかった私としても久々に、アドレナリンが分泌され、能力以上のことを達成したかのような高揚感を体験出来たことは大いに今後の糧になるように思う。

MIT では講義も少し行った。今回の身分は客員准教

授 (Visiting Associate Professor) であったため院生からも Professor Hiura と呼ばれ、英語で劣る自分としては落ち着かない気分だった。しかし講義にしろ議論にしろ、相手が求めている知識や情報を持ってさえいれば少しおかしな英語でも真剣に聞き、不明点は尋ねるといいコミュニケーションが成立する。その上では、多少の言葉の壁はむしろそれを越える喜びも与えてくれるものかもしれない。

3. おわりに

講義を交代しすべて前期に済ませてから脱出するという都合上、たった半年余りの短い期間であった。これを、もっとゆったりと穏やかな空気の流れる中、自分にとって未知の分野の教科書でも読みながらじっくり充電をするという選択肢もあったであろう。しかし密度の濃い、刺激的な時間を送った中で得たものは、一言で言うなら知識よりも体験であり、それにいくつかの成果がついてきたことは幸いであった。



1月6日の夕食
年始からは毎晩食べ物をオーダーし、みんなで食べていた。

【著者略歴】

日浦慎作

大阪大学大学院基礎工学研究科准教授。コンピュータショナルフォトグラフィ、三次元画像計測とそのVR・コミュニケーション応用の研究に従事。博士(工学)。